

発達支援のRTIモデル Tier 1の重要性

公益社団法人 子どもの発達科学研究所
副所長・主任研究員 大須賀 優子



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

1

RTIモデルの採用



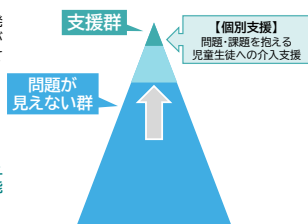
© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

2

RTIモデルの採用

支援が必要だと分かってからの 支援では足りない。

- 不登校児童生徒への支援も、いじめの早期発見早期支援も、不登校になってから、いじめが起きてからの支援は、「子どもの失敗を待つて行う支援」である。
- 学校に行けない事実は、子どもと保護者を傷つける。いじめは、子どもを傷つける。こうした傷つき体験をする前に、支援を行うことが大切。
- 「問題がない」ように見える群は、問題が見えないだけであって、リスクを抱えている可能性がある。
- こうしたリスクを下げることが重要。



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

3

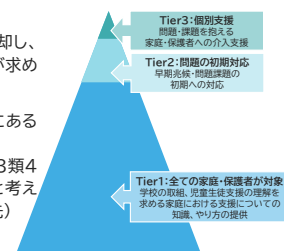
3

RTIモデルの採用

RTIモデル(Response To Intervention Model) の採用

子どもの失敗を待つモデルから脱却し、予防を含んだRTIモデルへの変化が求められる。

RTIモデルの中心は、Tier1、予防にあるが、予防は科学がないと難しい。生徒指導提要(改訂版)にある2軸3類4層支援とRTIモデルは、ほぼ同じと考えて良い。(歴史的にはRTIモデルが先)



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

4

4

RTIモデルの採用

Tier 1 の難しさ

- 問題が起きないようにする予防が重要だが、「問題が起きていない状態を保持する」という目標が見えにくい。
- しかも、何をすれば問題が起きないのか、がわからない。
- 様々な取り組みをしたとしても、その効果があったのかどうかかわからないので、取り組みの継続が難しい。

© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

5

5

RTIモデルの採用

Tier 2、3の難しさ

- 何が早期兆候なのか、わからない。(欠席が始まる、という段階では、既に問題が起きていると考えることもできる)
- 早期兆候に個人差があるかもしれない。
- 早期兆候を見つけたとしても、どうすればいいのかが分からなければ始まらない。
- 個別の支援も、個人差、環境差があり、どうやってアセスメントを行い、どのような支援を、どのような方法提供すればいいのかわからないという難しさがある。

© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない複製を禁じます。

6

6

不登校要因調査

© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。

7

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

子どもの発達科学研究所が
文部科学省の委託を受けて調査を行った

【COCOLOプラン:実効性を高める取組】

- 不登校の要因の分析、不登校傾向の児童生徒の把握
- 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の調査内容(不登校要因)の見直し

調査報告書

<https://kohatsu.org/20240325research-report/>

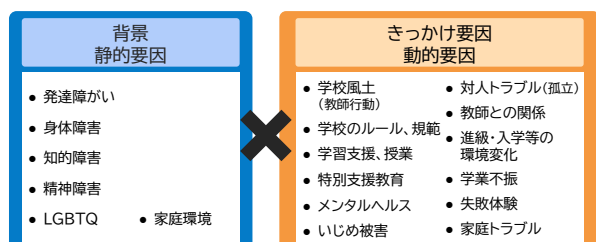
© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。



8

不登校要因調査

考え方:不登校の要因(先行研究から考えるモデル)

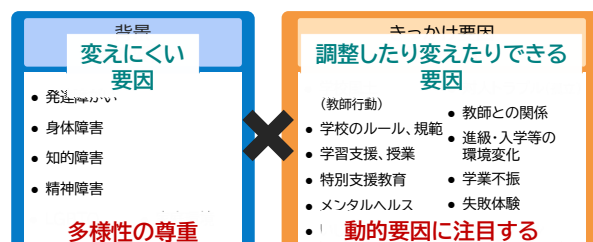


© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。

9

不登校要因調査

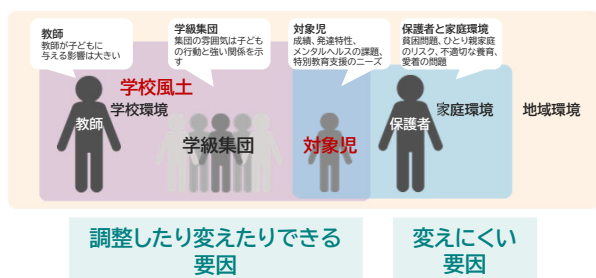
考え方:不登校の要因(先行研究から考えるモデル)



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。

10

不登校要因調査



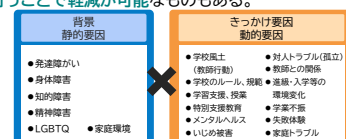
© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。

11

不登校要因調査

要因から支援に

- 静的要因は、基本的には変えられない、そこを問題視すると人権侵害にあたる可能性が高い。
- ただし、静的要因の中には、合理的配慮の提供、特別支援教育などのシステムや長期に渡る支援を行うことで軽減が可能なものもある。
- 教育側は動的要因に対してアプローチする必要がある。



© Child Developmental Science Research. Confidential | 許可のない転載を禁じます。

12

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

調査の特長

1. 4つの教育委員会の全面協力を得た

2. 不登校の児童生徒だけでなく、そうでない児童生徒(一般群)について、本人、保護者、教師の三者から回答を得た

3. 事実ベースでの調査とした
(教師の考えを聞くのではなく、把握している事実)

4. 単なる記述統計ではなく、解析を行った
(統計的な関連、有意差を明らかにした)



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

13

13

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

自治体ごとの実施数

実施数	教師調査		児童生徒調査		保護者調査		
	調査A	調査B	調査A	調査B	調査A	調査B	
吹田市 (大阪府)	指定校	1,365	64	1,373	48	(未実施)	11
	その他	(未実施)	522	(未実施)	48	(未実施)	62
府中市(広島県)	8	(未実施)	69	380	11	357	7
	5,913	140	5,238	156	2,923	45	
山梨県	小中学校	11,785	559	7,796	356	6,498	203
	高校	4,448	70	3,523	76	2,013	21
合計	23,519	1,424	18,310	695	11,791	349	



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

調査A: R4不登校でない児童生徒、調査B: R4不登校の児童生徒

14

14

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

【児童生徒回答】

不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い(きっかけ要因)

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い(オッズ比)	オッズと95%信頼区間
いじめ被害	15.0%	26.2%	2.00	
いじめ被害	8.7%	2.6%	0.28	
いじめ以外の友人関係のトラブル	16.6%	24.8%	1.66	
仲の良い友だちがいない	7.4%	19.9%	3.13	
先生と会ひなかつた	14.3%	35.9%	3.35	
先生から厳しく怒られた、体罰があった	7.5%	16.7%	2.45	
授業が分からない	35.4%	47.0%	1.62	
授業が簡単すぎた	11.3%	7.2%	0.61	
成績が下がった	41.6%	37.9%	0.86	
宿題ができない	24.5%	50.0%	3.08	



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

15

15

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

【児童生徒回答】

不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い(きっかけ要因)

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い(オッズ比)	オッズと95%信頼区間
いじめ被害	15.0%	26.2%	2.00	

➡ いじめ被害があると、不登校のリスクが2倍程度高まる



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

16

16

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

【児童生徒回答】

不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い(きっかけ要因)

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い(オッズ比)	オッズと95%信頼区間
いじめ被害	15.0%	26.2%	2.00	
いじめ被害	8.7%	2.6%	0.28	
いじめ以外の友人関係のトラブル	16.6%	24.8%	1.66	
仲の良い友だちがいない	7.4%	19.9%	3.13	
先生と会ひなかつた	14.3%	35.9%	3.35	
先生から厳しく怒られた、体罰があった	7.5%	16.7%	2.45	
授業が分からない	35.4%	47.0%	1.62	
授業が簡単すぎた	11.3%	7.2%	0.61	
成績が下がった	41.6%	37.9%	0.86	
宿題ができない	24.5%	50.0%	3.08	



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

17

17

不登校要因調査

R5年度文部科学省委託事業 不登校要因調査

【児童生徒回答】

不登校児童生徒と不登校でない児童生徒の違い(きっかけ要因)

質問項目	不登校でない児童生徒	R4不登校の児童生徒	違い(オッズ比)	オッズと95%信頼区間
いじめ以外の友人関係のトラブル	16.6%	24.8%	1.66	
仲の良い友だちがいない	7.4%	19.9%	3.13	
先生と会ひなかつた	14.3%	35.9%	3.35	
先生から厳しく怒られた、体罰があった	7.5%	16.7%	2.45	
授業が分からない	35.4%	47.0%	1.62	
授業が簡単すぎた	11.3%	7.2%	0.61	
成績が下がった	41.6%	37.9%	0.86	
宿題ができない	24.5%	50.0%	3.08	

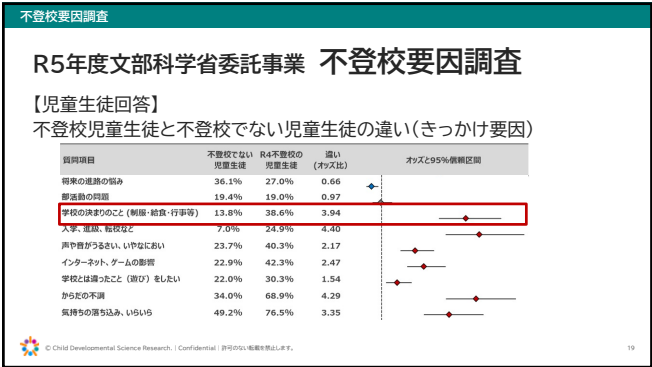
➡ これらはすべて、不登校に関連する要因



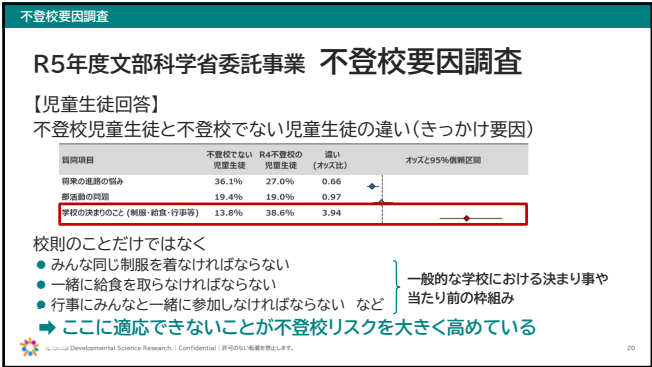
© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます。

18

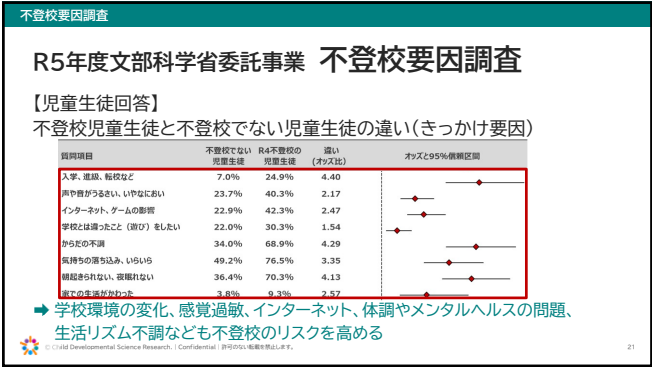
18



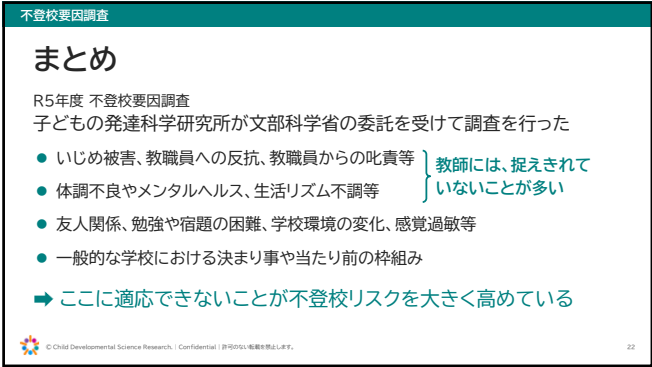
19



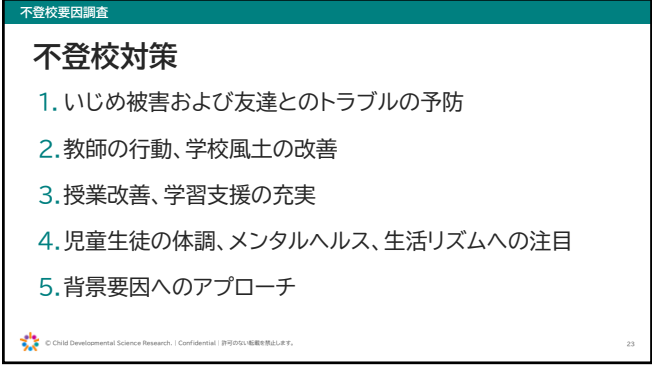
20



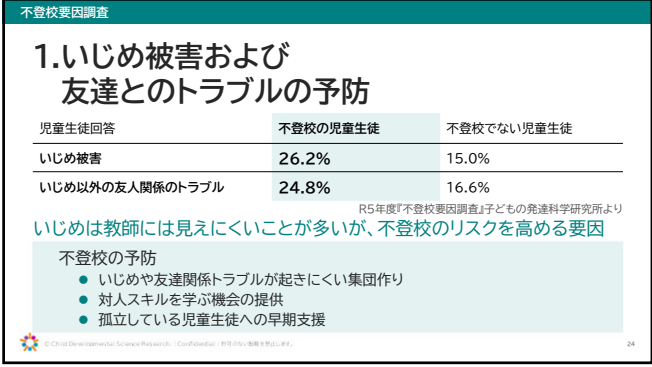
21



22



23



24

不登校要因調査

2.教師の行動、学校風土の改善

児童生徒回答	不登校の児童生徒	不登校でない児童生徒
先生から厳しく怒られた・体罰	16.7%	7.5%
先生と合わない	35.9%	14.3%

児童生徒回答・教師回答	児童生徒 オッズ比	教師 オッズ比
学校のきまり (制服・給食・行事等への不適応)	3.94	20.40

学校風土を形成する要素

- 教師の態度や指導方法
- 学校のルール設定や活動の設定

R5年度『不登校要因調査』子どもの発達科学研究所より

適切でない場合
不登校のリスクを高める

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

25

不登校要因調査

3.授業改善、学習支援の充実

児童生徒回答	不登校の児童生徒	不登校でない児童生徒
宿題ができない	50.0%	24.5%
授業が分からない	47.0%	35.4%
成績が下がった	37.9%	41.6%

R5年度『不登校要因調査』子どもの発達科学研究所より

学校では授業の充実が必須
多くの教師や教育委員会が努力している

教師が考える「良い授業」

児童生徒が認識する「分かりやすい授業」

大きな乖離の可能性を検討

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

26

不登校要因調査

4.児童生徒の体調、メンタルヘルス、生活リズムへの注目

児童生徒回答	不登校の児童生徒	教師回答
体調不良の訴え	68.9%	18.5%
不安・抑うつ訴え	76.5%	19.0%
朝起きられない、夜眠れない	70.3%	8.3%

R5年度『不登校要因調査』子どもの発達科学研究所より

教師には見えにくい

- デジタル端末等を活用 ➡ 「見える化」する
- 「見える化」した児童生徒の不調 ➡ 支援体制の構築

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

27

不登校要因調査

5.背景要因へのアプローチ

教師回答によると

- 発達特性
- 障がい
- 家庭の困難さなど

不登校と関連することが明らかに

✗ 不登校になっても仕方がない

➡ 支援が十分に届いていないために不登校になっているのではないか

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

28

不登校要因調査

5.背景要因へのアプローチ

発達障がいの疑い、診断のある児童生徒
不登校の状態にあるのは20%程度
(第66回日本教育心理学会自主企画シンポジウム発表、足立、2024)

➡ 残りの80%の児童生徒は、不登校ではない

発達障がいの児童生徒が

- 気持ちよく通える学校
- 特別支援教育の在り方について

考える必要がある

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

29

不登校要因調査

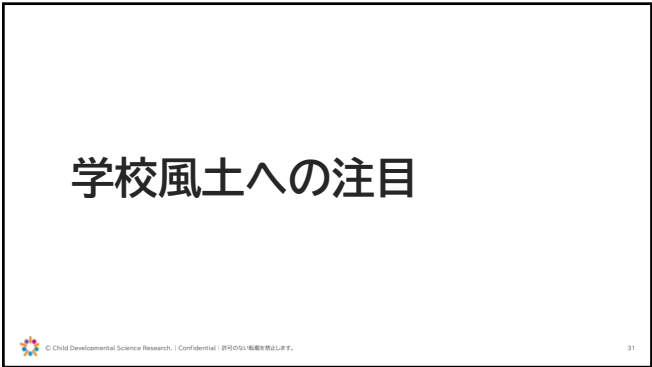
5.背景要因へのアプローチ

多様性を尊重する社会
学校においてもインクルーシブ教育が求められている

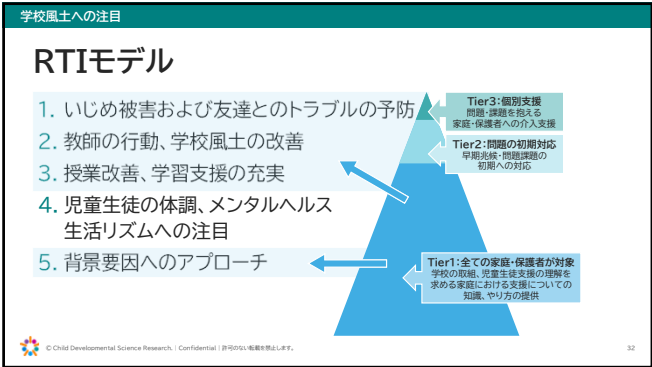
- 多様な児童生徒(発達特性・家庭状況など)
➡ 受け入れ、支援する学校体制を整備
- 合理的配慮、特別支援教育など
➡ 継続的支援を提供

© Child Developmental Science Research / Confidential / 許可のない転載を禁じます。

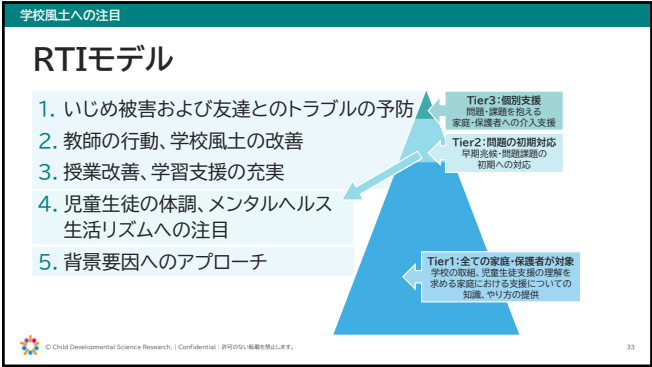
30



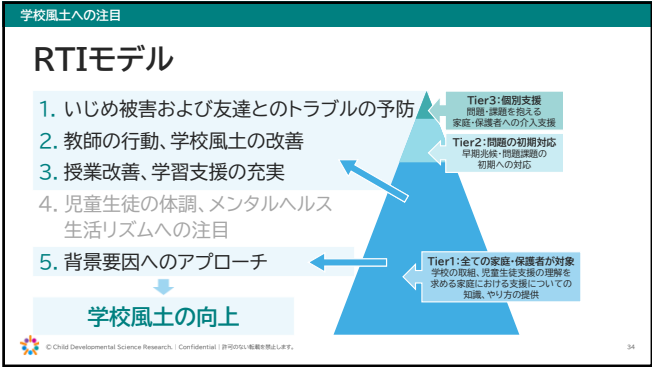
31



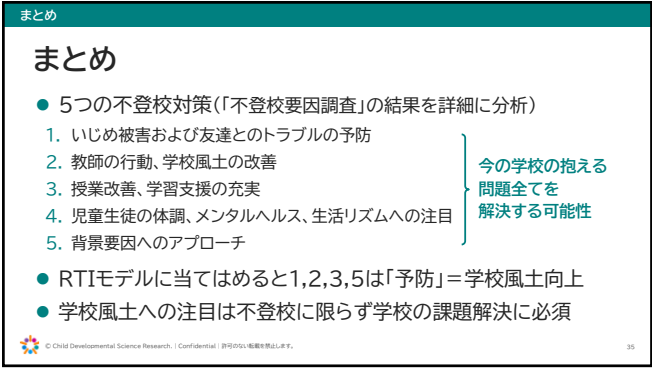
32



33



34



35



36